金融・経済 おもしろ豆知識

古今東西、昔から伝えられているおとぎ話から現代の映画やマンガまで、お金や経済にまつわる物語は数え切れないほどたくさんあります。私たちにお金や経済にまつわる知識や教訓を分かりやすく伝えてくれる物語のうち、今回は落語を取り上げます。

第1回

落語「千両みかん」

みかんひとつが1億円!? 値段って何だろう?

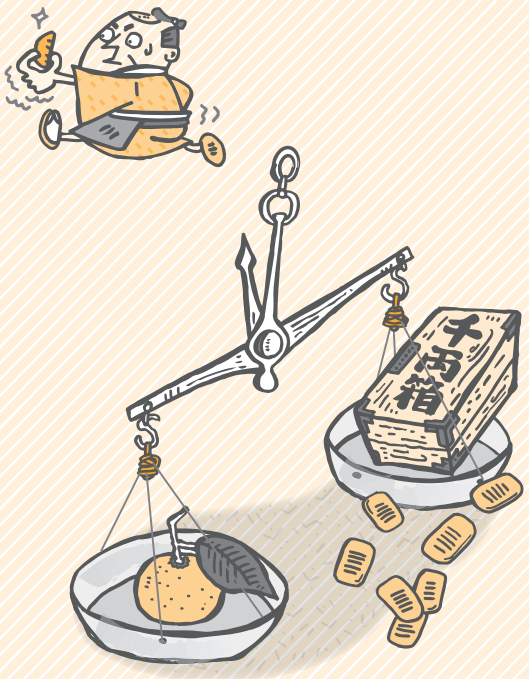
最近は若い人にもファンが多い落語。落語家さんによってはチケットの入手が困難になることもあるそうです。

さて、そんな落語の古典に「千両みかん」という演目があります。

ある呉服屋の若旦那が、「どうしてもみかんを食べたい」という思いがつのり過ぎて、重病になります。大旦那から「みかんを探せ」と命じられた番頭ですが、時は真夏。みかんを売っている店などありません。ようやく見つけた青物問屋にひとつだけあったものの、値段は千両。日本一と自負するその問屋は、「『真夏にどうしても食べたい』というお方のために、ほとんどが腐るのを覚悟で毎年みかんを大量に貯蔵している。だから千両なのだ」と言うのです。

番頭は、いくらなんでも高すぎると帰りますが、大旦那は「それで息子の病気が治るなら安いもの」と、あっさり千両を渡します。若旦那はみかんを食べて元気になり、十粒あったみかんのうち三粒を番頭に渡して言いました。「両親に一粒ずつ、苦労をかけたから番頭も一粒もらっておくれ」。ひとつ千両のみかんなら、三粒で三百両です。自分が一生働いても稼げない大金だ…と欲に目がくらんだ番頭は、みかん三粒を大事そうに抱えて、どこかに逃げていってしまいました。

柿ひとつが6文の時代に、みかんひとつで千両（江戸時代中期で1両は4000文）です。約260年と長い江戸時代の中では、貨幣価値の変動もあるため一概にはいえませんが、千両＝1億円以上とも考えられ、番頭が思いあやまるのも分かる気はします。

冬なら誰もが買えるみかんが、保存技術がない当時は、夏に入手することは極めて困難。――それでもどうしても食べたがる若旦那。暖簾の威信にかけてみかんを保存していた問屋。息子のために千両をポンと出す大旦那。そしてみかん三粒を「横領」して逃げ出す番頭。彼らの行動は、モノの価格が、需要と供給、モノに対する人の思いや手間暇、から決まることを笑いの中に教えてくれます。

でも番頭さん、持ち逃げしたみかん三粒どうしたのでしょうね。普通の人にはみかんはみかんですから…。